

わが心の遍歴

(7) 現代における宗教と科学・技術の問題

花岡 永子



花岡 永子(別姓:川村 永子) /かわむら・えいこ

1938年生まれ。'59年京都大学文学部入学。'63年同学部哲学科(宗教学)卒業。'68年京都大学大学院宗教学博士課程中退。西ドイツ・ハンブルグ大学神学部組織神学博士候補生コース留学。'73年同大学より神学博士(Doktor der Theologie)の学位を取得。'87年女性老師家'96年には京都大学より文学博士号を授与される。京都大学、大阪大学、神戸大学他で哲学、宗教学、倫理学、ギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語などの非常勤講師を経て、現在大阪府立大学大学院人間文化学研究所教授として哲学、宗教学を教える。

著書は『宗教学の根源的探求』(北樹出版、'98)、『心の宗教学』(新教出版社、'94)、『神と宗教学』(北樹出版、'94)、『キルケゴールの研究』(近代文芸社、'93)、『キリスト教と西田哲学』(新教出版社、'88)他多数。

本誌のNo.38の(6)での「脳死による臓器移植の問題」について、有り難くも読者の皆様から色々ご意見を頂いた。それで、現代の大きな問題の1つである科学・技術と宗教あるいは宗教学との関係の問題について、もう少し詳しく考えさせて頂くことに致したい。沢山の事柄のうち主なものだけに限定して、述べさせて頂くことにする。

1. 「個」の立場と「全体」の立場の相即性について

全体の立場は、人間の言えば「人類」の立場であり、一般的には「類」の立場であると言えよう。また、自然科学的な遺伝子レベルでは、DNAやRNAの分析結果によって知られるように、大昔からの各生物や動物や人間の「種」における生命の連続性が語られ得るであろう。そして、これらの「種」や「類」における各々の立場は、いつまでも世代継承されていくことが望まれるであろう。そのみならず、宇宙的生命や宇宙的意識も絶えることなく連続していくであろうと予想される。これが、諸科学や諸技術の目覚ましい発展の結果としての現状である。しかし、そうであるからといって、個の立場が、無視されて良いということにはならないのではないだろうか。

欧州や日本や世界の各国の文化が示しているように、民衆の各々の「個」の立場は、古代や中世においては、全体の立場と相即的な立場にあるものとは認められていなかった。「汝自身を知れ」と語ったソクラテスにおいてすら、個としての個人は「徳」(virtue)の下位に置かれており、哲学者の徳である「知恵」に徹する結果、個としてのソクラテスはその個としての「いのち」を犠牲にしたのであった。因みに、ソクラテス以来、ヘーゲルに至る西欧の主流の「形而上学」としての哲学(=主客の分離の基礎の上で、主体が一切を実体的に対象化、客観化する立場)は、心身二次元論の基盤の上に成り立ってきた。あのソクラテスにおいてすら、身体は永遠の魂(心)を閉じ込めておく刑務所と見なされていた。この哲学のその後の進展の頂点にある19世紀初頭のヘーゲルにおいても、身体的、現象的なものは、概念化、理念化されて、最終的には捨象(=現象の世界に属し、永遠には属さないものとして切り捨てられること)されねばならないものでしかなかった。

個の立場は、典型的には近世のデカルトにおいて初めて哲学的に認められるに至った。デカルトの「われ思う故にわれあり」は、一切を疑っても、その疑っている自らの「我」を疑わなかったことを物語っている。デカルト以前では、一切は神から出発し、我を疑っても、神が疑われることはなかった。デカルトでは逆に、神ではなく、個としての自らの「我」がすべての基礎に置かれたのであった。その後、この立場は、18世紀のカントによって更に哲学的に補強された。カントは、人間の理性の「自律」(古代の奴隷制や中世までの封建制での「他律」や神を頂点に置く階級制での「神律」でもない!また、現代の日本でも未だ様々の領野で横行している「男尊女卑」の考え方もない!)に基礎づけられた人格の尊厳性を樹立した。カントでは、人間の個としての人格の「いのち」が他者のための道具や手段となることは許されず、個のいのちは「目的自体」であることが理性の次元で哲学的に樹立された。この立場は、その後19世紀のヘーゲルによって代表されるような、最終的には全体(「類」)や社会(「種」)の立場を最優先するような哲学によって消し去られたかのようなのである。しかし、そのヘーゲルに対しては、キリスト教の立場からではあるがS.キルケゴール(1813 - 1855)によって、神の前の「単独者」(人類にも、社会にも、遺伝的素質にも、また個人の誰にも責任転嫁の出来ない、ただ一人で神の前に立つ個)の立場が強調された。その後、20世紀においても、M.ブーバーやP.ティリッヒやH.ティエリケ(筆者の恩師)等々の数限り無いユダヤ教やキリスト教の神学者たちによって、「類」や「種」の立場と同じ重みを持つ「個」の立場の重要性が語られ、叫ばれてきた。彼らは、第一次、第二次世界大戦で、個が無視され、類や種が優位に置かれた場合の世界や社会や人間の心が如何に悲惨で動物的になるかをその眼で見据え、しかもその悲惨さ、おぞましさを直接自ら身を以って経験してきたからであったと推察されよう。このような流れの中で、日本の西田幾多郎では、個と世界ないしは個と人類の立場が、共に同じ重み(西田の用語では「絶対矛盾



アガベ(愛)に生き抜かれた谷口財団の故谷口豊三郎社長(向かって右から2人目)、同氏は世界を友情で結び合わそうと、60年余り、18部門での国際会議のシンポジウムを支援された。



慈悲に生きようとするフェリスモ元会長の矢崎勝彦京都フォーラム事務局長(前列向かって右端)。同氏は、世界の対話を通しての平和の為に、10年以上も京都フォーラム事務局長や将来世代総合研究所を支援され続けている将来世代国際財団理事長。

的的自己同一」)で成立する立場、いわば立場なき立場としての「絶対無の場所」の哲学が樹立されていると理解される。西田哲学においては、個が、つまり個の自己が、無視されないで、どこまでも世界と同じ重みを持ち、世界が個を限定(個の有り方を規定し、変化させる)するのみならず、個も世界を限定(世界の有り方を規定し、変化させる)するような世界が可能である。

2. 宗教と科学・技術の問題

宗教と科学・技術の問題を日本においてだけではなく、世界的レベルで考察し、更にアメリカでのこの問題を考察する対話においては、西田哲学やV.v.ヴァイツゼッカーやその甥であるC.F.v.ヴァイツゼッカーだけではなく、アメリカの現代において思想的、哲学的に強力な影響力を持っているA.N.ホワイトヘッド(1861-1947)の「有機体の哲学」を学ぶことが必要であった。そのために著者は、49才の時から約12年間程、一心不乱にA.N.ホワイトヘッドの哲学を学んだ。彼は、理系と文系の学問は根本的には、同一の原理によって成り立っていると直観しているからである。また、21世紀にはそのような哲学が要請されると、筆者も考えていたからであった。因みに、同じお考えの、以前に本誌36号で触れたFAS協会の元理事長で、数学者でもあられた故山口昌哉京都大学名誉教授から理系と文系の学問は同一の根源から成り立っていることを、FAS協会編の『自己・世界・自然と科学』(法蔵館、1998)に執筆することを筆者は3年程前に依頼されて、考察したこともあった。しかも、その際の山口先生のご注文は、西田哲学を、その用語「絶対矛盾的自己同一」を使用しないで説明することであった。色々の国際学会でご一緒させて頂いた山口先生のご注文とあらばと、喜んでそれを試みたことが、今、筆者には懐かしく思い出される。

それはさておき、哲学においてのみならず、19世紀末以来の物理の世界でも、それまでは絶対と見なされていた時間と空間がアインシュタインの相対性理論によって相対的となり、20世紀にはN.ボーアの量子論やハイゼンベルクの不確定性原理によって観察者としての個が微粒子の世界では観察に際して大きな影響を持つことが明白となり、主客の分離の上で主体が一切を表象を通して対象化、客観化し得ないことが分かってきた。

物理学ではニュートン以後、相対性や相補性等々の主客未分の次元に起源する様々な原理が認められてきているように、哲学においてもカントあるいはニーチェ以後、新しい物理学を踏まえた上で初めて妥当する新しい哲学が樹立されてきている。日本の最初の独創的な哲学者である西田幾多郎においても、絶対的な時間や空間が破られ、因果律(=自然法則の必然性)や根拠律(=どんなものも根拠無くしては存し得ない)が破られた「絶対無」のパラダイムでしか妥当しない哲学が樹立された。西田のこの絶対無の場所の哲学においては、類・種・個のいずれの立場も、それぞれ共に絶対の中心であると同時に周辺でしかない。この場合、類、種、個のそれぞれの立場が、以前に述べた華嚴経のあの「印陀羅網」の各々の宝珠と理解されれば、西田の立場が分かり易くなるであろう。

以上の簡単な説明で述べたかったことは、21世紀においては、類、種、個のいずれの立場も等閑に伏され得ないということである。類・種・個のそれぞれの立場は、相互のバランスやリズムにおける透明な関係の内に成り立っており、それらのいずれの立場が誇張されても、また逆に等閑視されても、世界も社会も個も歪みを来たずと考えられるのである。これは、有史以来の人間の歴史を振り返って見さえすれば、明白である。

同様に心身一如である筈の人間において、心のみが重視されたり、逆に身体のみが重視されると、世界、社会、人間の個にもそれぞれ歪みが生じてくる。他の4つのパラダイム(=相対有、相対無、絶対有、虚無)ではそうでなくとも、絶対無のそれが妥当する絶対の無限の開け(西田の「絶対無の場所」)では、心身一如の人間は死しても心身一如である。そこでは個の心でもある身体が死せば個の身体でもある心は、共に死し、大なる心、大なる永遠のいのち、つまり絶対無(無実体的で、絶対の自己否定の場の開け)へと帰還して行く。脳死による臓器移植では、心身一如の個の身体がバラバラにされ、他己へと部品の如くに嵌め込まれ、同時に個の心もバラバラとなる。そこで、心身一如である筈の個が脳死による臓器移植によって分解されることが他の4つのパラダイムでだけでなく、絶対無のそれにおいても可能なのは、愛と慈悲によってのみと理解されるのである。このパラダイムにおいては、何事にてあれ、愛あるいは慈悲のみが働くことと理解されるからである。